

O R 教 育 と デ ー タ

森 口 繁 一

実践的OR教育のために

ORは本来実践のために生まれたものである。ORの教育もまた実践的でなければならない。机上の空論をもてあそぶ部分もあっていいが、現実に関心を持ち、勇気を育てることこそ肝心である。現実のデータを見て立ちすくんでしまっても手も足も出ないようでは困る。だから、OR教育の過程では、たえず生のデータにぶつかって、そこから意味を読み取り、行動の指針を打ち出す修練を積み必要がある。

ところで、生のデータをどうやって手に入れたらいいか。データは本来他人からあてがわれるべきものではなくて、自分で工夫して獲得すべきものである。ほしいデータがどこにあるかを探し出すのも修業のうちである。また、どこにも存在しないデータを、自分ではかったり数えたりして手に入れるのも修業のうちである。実際、すぐれたORの事例は、ほとんど例外なく、よいデータを得るために独特の工夫をこらしているものである。

しかし一方、データのこなし方の修練をある程度積んでからのほうが、どういうデータを、どれぐらい、どのように取ったらよいかがよくわかるという面もある。

だから、OR教育の過程では、まずいろいろなデータに挑戦して、そのこなし方の修練を積み、そのうえでこんどは、ある目的を設定してそのためのデータを収集し利用するという順序がよいであろう。

データの共同収集

OR教育のためのデータを、教育にたずさわる先生方が、1人1人で集めるのは容易でない。もちろん、先生が自分で手に入れ、自分で料理したデータは、貴重な教育資源であり、それだけ教育効果が高いのであるが、しかし、いろいろな種類のデータを全部1人で集積するには、ずいぶん時間がかかるであろうし、手間もたいへんで、なかなか意に任せないところがあると思う。

そこで、教育上有用と思われるデータを共同で集めて提供するサービスを学会でやったらどうかと考えついたのが、1974年私が会長に就任したときである。それからOR-DP(ORのためのデータとプログラム)の研究部会が発足し、三浦大亮君を中心に、大ぜいの俊秀の協力を得て活動を開始した。また情報処理研修センターから

の財政的援助もあって、順調にこの仕事が進み、1976年3月には313ページの大部な研究報告がまとめられた。そしてその夏には磁気テープにこれらのデータを記録したものが実費で提供できる態勢も整った。

その後幸いにしてこれらの報告書や磁気テープの売れゆきは上々とのことであり、学会としてのOR普及活動にそれ相当の貢献をしたことになる、大いに喜んでい

電子計算機実動状況

私自身は、この報告の第6章に電子計算機実動状況のことをかいた。この種のデータとしては、「コンピュータ白書」と「J E C C コンピュータ・ノート」によいデータが毎年報告されるので、収集については格別の苦労はない。

それでも念のために電算機で合計の検算をしてみたところ、合計が合わないところがたくさんできた。台数は丸めのない整数値だから、合計は最後のけたまでピタリと合うべきであるのに、それが合わない。よく調べてみると、明らかに誤植と思われる箇所がいくつも見つかった。しかも、ある年の誤植がつぎの年の版にそのまま継承されている。いままで信頼していただけに、これにはがっかりもし、むしろあきれたといったほうがいい。

金額のほうは百万円単位に丸めてあるので、合計がピタリと合わなくてもよいわけであるが、それでも、その違いが全部一定の符号をもっているのが気になったし、統計的にもっともと思われる限度を越えるものもあったので、よく調べてみたら、やはり大きい誤りが見つかった。そして丸めが四捨五入でなくて切捨てでなされていることもわかった。やはり合計の検算をやってもよかった。もっとも、もとのままのデータを集録しておいて、検算をしてもらうほうがいっそう「教育的」だったかもしれないという気もする。

む す び

このOR-DPの仕事がOR教育に役立つことと、さらに大ぜいの協力によってますます立派なものになっていくことを願って筆をおくことにする。

(もりぐち・しげいち 電気通信大学)

FORUM